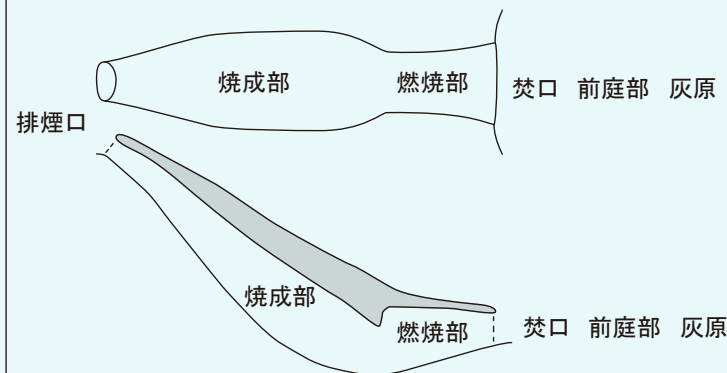


窯跡の部位の名称



SY-1は、焼成部と燃焼部の一部が残存しています。燃焼部には炭化物が5層以上堆積しており、窯が何度も使用されたと考えられます。また、この窯跡からは多くの遺物が出土しており、中には完形の長頸壺3体が互いに倒れ掛かるようにして見つかりました。床面より少し高い位置で出土したことから、窯を廃棄する際に行われた祭祀などに関連している可能性があります。

さらに、床に敷かれた砂の下には、炭化物とともに多量の須恵器片が敷かれています。湿気取りなどを目的とした床下構造と考えられます。



SY-2は、焼成部が残存しており、燃焼部側に舟底ピットが見つっています。また、床面が4面見つかり、少なくとも5回以上使用されていたと考えられます。



SY-3は、焼成部と燃焼部の一部が残存しています。燃焼部には炭化物が2層堆積しているため、少なくとも2回は窯が使用されたと考えられます。

床面より少し高い位置から蓋や坏身の細片が多く出土しました。焼成不良の製品もあったことから、窯の廃棄と同時に不良品を分別し、そのまま廃棄した可能性があります。



SY-4は、焼成部のみが残存しています。

この窯跡は、一度大きく崩落したのち作り替えられたと考えられ、断面では床の下に最初の窯跡が観察できます。また、壁からは炭化した木材が出土しました。壁から天井にかけての構造材の可能性があります。



SY-5は、焼成部が残存しています。縦断面では、地山の被熱範囲が剥落した部分に青灰色の砂が敷かれ、補修している様子が観察できます。

また、流入土上に須恵器の杯蓋や杯が出土し、杯と蓋がセットになった状態のものがありました。



SY-6は、焼成部と燃焼部の一部、前庭部もしくは、灰原の一部が残存しています。

他の6基の窯跡と比べ、主軸方位・出土遺物の時期が異なっており、SY-7が壊れた後に築窯したことが確認できました。

床面より少し高い位置から多くの遺物が出土しました。完形の遺物が見つからなかったことから、窯の廃棄と同時に不良品を分別し、そのまま廃棄した可能性があります。



SY-7は、SY-6と重なっているため、SY-6の調査終了を待って、本格的に調査します。現在のところ、南側の道路から見た断面が観察できます。断面のある場所は燃焼部と考えられ、炭化物の堆積がみられます。SY-1と同様に複数の層が堆積しており、こちらでは4層以上確認しています。



SY-8は、焼成部が残存しており、燃焼部側に舟底ピットが見つっています。また、燃焼部側の流入土上に甕の口縁部が下向きに置かれていました。